

論文審査の要旨

報告番号	㊦・乙 第 2996 号	氏 名	馬場 勇太
論文審査担当者	主査 瀧本 雅文 教授		
	副査 吉田 仁 教授		
	副査 坂下 暁子 教授		
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>骨髄異形成症候群（myelodysplastic syndrome, MDS）は無効造血と前白血病状態で特徴付けられるクローン性造血障害である。MDS は特徴的な形態異常と染色体異常を伴う。染色体異常が予後に関わる一方で、形態異常と予後の関係は明らかになっていない。本研究は形態異常の指標として赤血球容積分布幅（red cell distribution width, RDW）を用いて赤血球指数や鉄代謝、予後との関連が解析された。2008 年から 2016 年までに昭和大学病院で MDS と診断された 101 人の患者が対象となった。</p> <p>RDW はヘモグロビン濃度と平均赤血球血色素濃度との間で弱い負の相関を認め、骨髄中の環状鉄芽球の割合と弱い正の相関を認めた。RDW が MDS においてヘモグロビン合成障害や鉄代謝障害の指標になるが示された。</p> <p>芽球の増加を伴わない不応性貧血では、RDW の増加は全生存期間の短縮と関連していた。一方、芽球の増加を伴う不応性貧血ではその関連を認めなかった。</p> <p>MDS において、RDW はヘモグロビン合成や鉄代謝と関連し、赤血球造血障害（無効造血）を反映する簡便で有用な指標であることが示された。さらに RDW の増加は芽球の増加を伴わない不応性貧血における予後因子となる可能性が示唆された。本論文は新しい知見を得ており、学術上価値のあるものと考えられる。</p>			
<p>論文題名：</p> <p>Association of red cell distribution width with clinical outcomes in myelodysplastic syndrome（骨髄異形成症候群における赤血球容積分布幅と臨床経過の関係）</p> <p>掲載雑誌名：</p> <p>Leukemia Research （Vol. 67・P.56-59・2018 年）</p>			

(主査が記載、500 字以内)